



令和4年度海洋水産資源開発事業<底びき網（かけまわし）：日本海北部海域>の調査概要

調査船：第二十三茂浦丸（35トン）

調査期間：令和4年5月1日～令和4年5月31日

調査海域：日本海北部海域（秋田県沖合海域）



調査の目的

秋田県沖合海域で操業するかけまわし漁法の底びき網漁業をモデルに、労働環境の改善や生産性の向上を目指した取り組みを行う。主に、ドロやクモヒトデ類等の不要物の入網を抑制しつつ、漁獲効率の向上も目指す新規漁具を対象とした調査を実施した。また、不要物の入網抑制による効果を活かした高品質化や未利用低利用魚の活用による収益の改善に向けた調査を実施した。

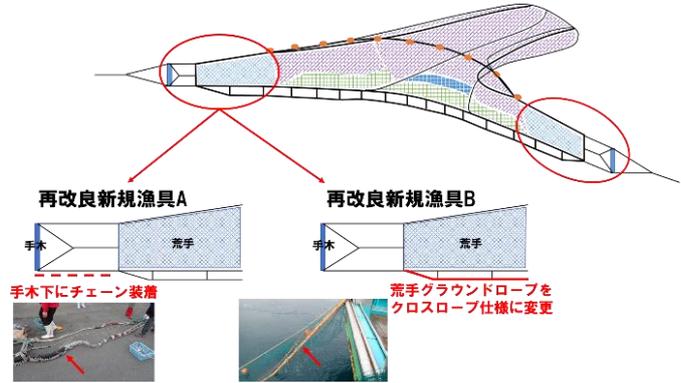


図1 再改良新規漁具の概略

本年度調査の主な成果等

新規漁具における漁具トラブル（揚網時に荒手網から袖網に掛けて捻れが生じる）の発生を実用レベルで問題ない程度まで改善するため、(A) 手木付近の下部ロープにステンレスチェーンを装着した仕様と、(B) 荒手網のグラウンドロープを三つ打ちロープからクロスロープに変更した仕様の2つの仕様の再改良新規漁具を用いた（図1）。その結果、再改良新規漁具Aでは漁具トラブルが発生せず、再改良新規漁具Bの漁具トラブル発生率は2.9%（34回中1回）であり、令和2年度調査における初期仕様漁具の20.7%、令和3年度調査における改良仕様漁具の11.5%から大きく改善した。また、漁具トラブルが発生しやすいとされる潮流が速い状況下でも既存の漁具と同様に問題なく操業することが可能であった。

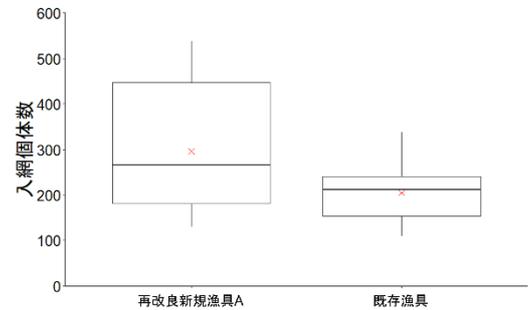


図2 トヤマエビの入網個体数比較

再改良新規漁具A・Bにおける不要物の入網抑制効果や漁獲性能を評価するため、既存の漁具との比較操業を行った。その結果、再改良新規漁具A・Bにおける不要物の入網抑制に対する十分な効果があり、代表的な水揚げ対象種であるトヤマエビの入網個体数は、既存の漁具を上回る傾向であった（図2）。



図3 水揚げしたウロコメガレイ

令和3年度に引き続き、漁獲物販売収入の向上に向けた未利用低利用魚の出荷を行った。クモダコ、ボウズイカおよびドスイカの頭足類とともに、ウロコメガレイの中サイズ以上の個体（図3）を選別して出荷した。ウロコメガレイの平均単価は133円/kgで取引されており、本種の利用促進が図られた。これらの試験出荷の取り組みにより、深場漁場操業の水揚げ金額は約3%向上した。